International Friendship Association (IFA)　令和3年10月17日発行　第361号

the COMMUNICATOR 11月号

IFA

心と心、世界と日本を結ぶ＊コミュニケーター

私と国際交流・インタビュー

祖父、山田寅次郎の思いを継ぐ

ワタリウム美術館　役員　和多利（わたり）　月子（つきこ）

小学校6年生になる前の春休みに、父とトルコに1週間滞在しました。その地での出来事は今もって私の人生で特別なことです。飛行機がトルコ空港に着いてしばらくして、機内に政府の人たちが入ってきて、父と私を先に降ろしてくれました。タラップを下ると、日本とトルコ国旗が付けられた黒塗りの車が待っていました。何と父と私の車は別々。一人どきどきしていると日本語の上手な年配の通訳の方が話しかけてくれました。突然、父と離れたのでどうなるかと思いましたが、ホテルに着くと父は待っており、それからはずっと政府の方が付いてくれて、祖父、山田寅次郎所縁の地を回りました。

●茶道の家に生まれる

祖父は茶道宗徧（そうへん）流家元山田家の養子でした。1890年、オスマン帝国の軍艦、エルトゥールル号が和歌山県沖で遭難した2年後に、民間で義捐金を集め、オスマン帝国（現トルコ）に届け、その地で26歳から10年間、異なる文化を前向きに受け入れ、オスマン帝国皇帝のアートディレクターとして日本・オスマン帝国友好関係の礎となりました。57歳で茶道の家元を継ぎ、92歳まで流儀発展に寄与しました。そうした話は、幼い頃におとぎ話のように父が私と弟に話してくれました。

祖父の遺志を継ぎ、父も茶道を広めるために国内外に、よく出かけました。ハワイ大学からの招待でお茶を紹介に行く際には、弟と小学3年の私も連れて行きました。祖父の家訓「男子たるもの、3ヵ国語をマスターせよ」を幼いながら私も胸にきざみました。

父がロータリークラブのガバナー（地区の役員）に選出され、米国での1ヵ月研修にも、まだ小学生の私を休学させて連れて行きました。父が研修中、私は世界各国の参加関係者にお茶を披露する手伝いをしました。滞在はサンフランシスコ他、全米を巡り、印象に残っているのは中西部ミネソタ州のミネアポリスです。博物館に最先端科学や医学の展示があり、子供に分かるように説明する館員に感動しました。

1964年、神奈川県生まれ。85年、英国・マーデン・グレンジ卒業。92年、ワタリウム美術館オーナーと結婚後、同美術館の役員を務める。2015年より、「山田寅次郎研究会」を主催し、祖父の資料調査を続けている。著書『明治の男子は、星の数ほど夢を見た―オスマン帝国皇帝のアートディレクター山田寅次郎』（2017年）。3女1男の母。

●英国留学と海外の門人

幼稚園から高校まで女子一貫校に学び、父の強い思いから英国に留学しました。留学前には、英会話取得のために、英国人翻訳者・ドロシー・ブリトンさんの紹介で、神奈川県・葉山に住む英国老紳士 Ted Hall さんの家に通いました。紅茶とクッキーをいただくのも勉強の一環、楽しい時間でした。留学先は父の知人、トーマス・クック・グループ（旅行社）支社長の紹介で英国ケント州にある学校にしました。

英国での初めての寮生活では友人もできず寂しくて時折、父に泣きながら国際電話をしました。その都度、「弱音をはくな」と言われましたが、後で母に聞くと、父も電話口で泣いていたそうです。その後、父から毎日、手紙で新聞の切り抜きが届き、それを見ながら頑張り、4年目に日本に興味のあるサマンサとの出会いもあり、楽しい思い出ができ卒業しました。

87年、父が病気で亡くなると、東京の大学でポルトガル語を専攻していた弟が正式に家元を継ぎました。若干20歳、母と私が4年間は弟を盛り立てて家を守ることに専念しました。

お稽古にいらしていた方の中には、スイスと韓国の方もいらっしゃいました。韓国の方は帰国後、支部を作り韓国文化も取り入れた茶道教室を開きました。スイスの方は、日本のお茶そのものを伝えたいと、帰国時には臼まで持ち帰りました。スイスでのお茶お披露目には、母と私、弟子数名で伺いましたが、ウイリーさんの嬉しい笑顔は今でも忘れません。

●伝統文化と現代美術

大学在学中の弟も東京で茶道を教え始め、私も手伝いました。毎週土曜日の夜9時に始まり、稽古後は数名の生徒でしたが話が尽きませんでした。月に1度は他の流儀の若宗匠や舞踏家、華道家などをお招きし意見交換もしました。そこで出会ったのが、現代美術を扱うワタリウム美術館オーナーの夫です。92年に結婚し、伝統文化と現代美術が結び付いたのです。

94年に長女が生まれ、次女、長男、三女の成長に合わせ、子供のためのワークショップ「アート・一日幼稚園、小学校」を考案し、日本の古典や海外のアーティストとの作品作りなど、子供たちにアートをより身近に感じてもらう体験の場を作りました。下の子の小学校卒業時にこの企画は終了しましたが、和多利家のモットーは、「一つのことを止めるときには、新しいことを見つける」でしたので、私の次の目標は祖父にしました。

実家にある祖父の資料を読み始め、2017から毎年、トルコを訪問し祖父の足跡をたどり、成果として本を出版することができました。折しも19年にはトルコ文化年を記念し、「トルコ至宝展」が国立新美術館で開催され、山田寅次郎がスルタン（皇帝）に献呈した品々が初めて里帰りし展示されました。今、長女は茶道に興味を持ち、次女は和菓子職人、長男と三女は大学生。それぞれの心の中に祖父のエネルギッシュな思いが残ってくれることを願っています。

山田家蔵

古書で紐解く近現代セミナー第 39 回　　2022 年 2 月 20 日（日）日比谷コンベンションホール

山田寅次郎
～日本とトルコの親善に生涯を捧げた「民間大使」～

ワタリウム美術館 和多利月子

第一部「山田寅次郎とオスマン帝国」

・エルトゥールル号遭難事故

・オスマン帝国での活躍

・　スルタンと寅次郎

第二部「寅次郎という人物を知る」

・生家・中村家

・青年時代の活躍

・宗徧流家元としての活躍

第三部「父の夢、私の夢」

・そして未来へ

山田寅次郎略歴

慶応 2 年（1866）	沼田藩・家老職中村家に生まれる
明治 14 年（1881）15 歳	山田宗寿（茶道宗徧流 7 世家元）の養子となる
明治 23 年（1890）24 歳	エルトゥールル号遭難事故/義捐金活動を行う
明治 25 年（1892）26 歳	外務大臣サイド・パシャに義捐金を渡す
	オスマン帝国第 34 代スルタン アブデュルハミト 2 世に謁見、甲冑と太刀を献上
	スルタンよりオスマン帝国勲四等メジディエ章を拝受
明治 26 年（1893）27 歳	中村商店を開業
明治 37 年（1904）38 歳	日露戦争
	駐オーストリア特命全権公使・牧野伸顕の依頼を受け、ロシア黒海艦隊の動向を監視
	建築家・伊東忠太が訪土、親交をむすぶ
明治 38 年（1905）39 歳	日本に帰国。「東洋製紙」を設立。その後も数回訪土
明治 44 年（1911）45 歳	博文館より『土耳古畫觀』を刊行
大正 12 年（1923）57 歳	茶道宗徧流八世宗有を襲名
昭和 32 年（1957）享年 91	大阪にて没

オスマン帝国の山田寅次郎

オスマン帝国第 34 代スルタン・アブデュルハミト 2 世は、明治天皇を尊敬し、日本文化・美術に大変興味を持っていました。かねてから日本との交友を願っていたアブデュルハミト 2 世は、日本語・文化を理解しなければ交渉ができないと考え「日本人が訪れた時は、余に知らせよ」と高官たちに命じていました。

明治 25 年（1982）4 月、山田寅次郎は、エルトゥールル号の義捐金を持参し、オスマン帝国のコンスタンチノープル（現・イスタンブル）に到着、外務大臣サイド・パシャに義捐金を渡し、大役を終えた寅次郎は帰国までの間コンスタンチノープルの街並みを見学していました。そこへアブデュルハミト 2 世からお召しがかかりました。日本人の正装である黒紋付袴に身を包み、家宝の甲冑と太刀を抱え、高官に導かれユルドゥス宮殿へと向かったのです。アブデュルハミト 2 世 50 歳、寅次郎 26 歳、この謁見から寅次郎の運命は一変します。

寅次郎にこのままオスマン帝国に残り、青年将校たちに日本語と文化を教えるよう命じました。スルタンに信用された寅次郎は、様々な命を受け、スルタンのアートディレクターとなったのです。

ペラ大通り（現・イスティクラル通り）に構えた中村商店コンスタンチノープル支店は、日本からの輸入品に課税がかからないようアブデュルハミト 2 世の特別な配慮を受け、スルタンをはじめ、皇族や高官たち御用達商店となったのです。

途中、アブデュルハミト 2 世の命で何度か日本とオスマン帝国の間を往復しましたが、

オスマン帝国には、明治 25 年（1892）~明治 38 年（1905）まで約 13 年間滞在しました。